ISSN 1348－1525

こもれび

宮城教育大学附属図書館ニュース

114号

2008. 7. 10 発行

私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～ Part.2

◎図書館からのインフォメーション
図書館改修に伴う利用について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
◎特集記事　私は図書館をこう活用した ～大学での“勉強法”～ Part.2
「『無駄？』な時間をすごしませんか」 ・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤　順子・・・・ 4
「『図書館＝本』とは限らない」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐々木ゆり・・・・ 5
「メタモルフォーゼのための読書」・・・・・・・・・・・・・・・・・・溝田　浩二・・・・ 6
「講義よりも図書館で～大学で勉強するということ」・・・・・・・・・井柳　美紀・・・・ 7
◎学生の読書室～私が選ぶこの一冊～（第９回） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
◎私と図書館
「図書館の思い出」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・黒川　哲也・・・・ 10
「学校図書館」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・片山　栄次・・・・ 11
「附属図書館と私」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・齋藤　嘉則・・・・ 12
「私にとっての図書館」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・松尾　隆治・・・・ 13
「未来を育てる図書館」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・渡邊　忠彦・・・・ 14
◎常設展示の報告
常設展示「中学校英語教科書　戦後の歩み」・・・・・・・・・・・・・藤田　　博・・・・ 15
◎平成20年度後期　開館カレンダー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
◎表紙の解説　蓼（たで）食う可憐な蝶 ―ベニシジミ―・・・・・・・・溝田　浩二・・・・ 16

図書館からのインフォメーション

図書館改修に伴う利用について

附属図書館では平成20年７月14日（月）から平成21年３月まで、耐震改修工事が行われることになりました。工事期間中、閲覧室の利用や資料の貸出ができなくなります。利用できなくなる資料については、７月１日（火）から７月13日（日）まで特別貸出を行います。また、７月26日（土）からは萩朋会館２階に仮設図書室を設置し図書館サービスを行います。

利用者の皆様には長期間にわたりご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願い致します。

改修日程

第一期改修工事（準備期間含む）：平成20年７月14日（月）～平成20年12月中旬

※上記の期間は図書館の利用は出来ません。（但し、多目的閲覧室は７月26・27日を除いて８月１日まで利用できます。）一部の資料と設備は７月26日から仮設図書室で利用できます。

第二期改修工事（準備期間含む）：平成20年12月下旬～平成21年３月末

※第一期工事終了後に仮設図書室を閉室し、図書館でサービスを再開する予定です。また、この期間は新２Ｆ電動書庫・新３Ｆ電動書庫が利用できません。

特別貸出

改修工事に伴い利用できなくなる資料については、７月１日（火）から７月13日（日）に特別貸出を行います。レポートや卒論、修論等で必要な資料は必ずカウンターで手続きをお願いします。この期間中に手続きを行わなかった資料は工事終了まで利用できなくなりますのでご注意下さい。

※講座でよく使う雑誌については、講座に特別貸出をしている場合があります。それらの雑誌の利用については、直接講座にお問い合わせ下さい。

仮設図書室

７月26日（土）から12月中旬まで萩朋会館２階に仮設図書室を設置し図書館サービスを行います。

開館時間：（平日）９：00～21：30　（土・日）10：00～17：00　（祝日）閉室

※夏季休業期間は（平日）９：00～17：00　（土・日、祝日）閉室

利用できる資料：分類番号300・400・700番台の図書、絵本・楽譜、小中学校・高校で現在使用されている教科書・指導書（過去分は図書館事務室で貸出できます）、新着図書・雑誌、当日の新聞

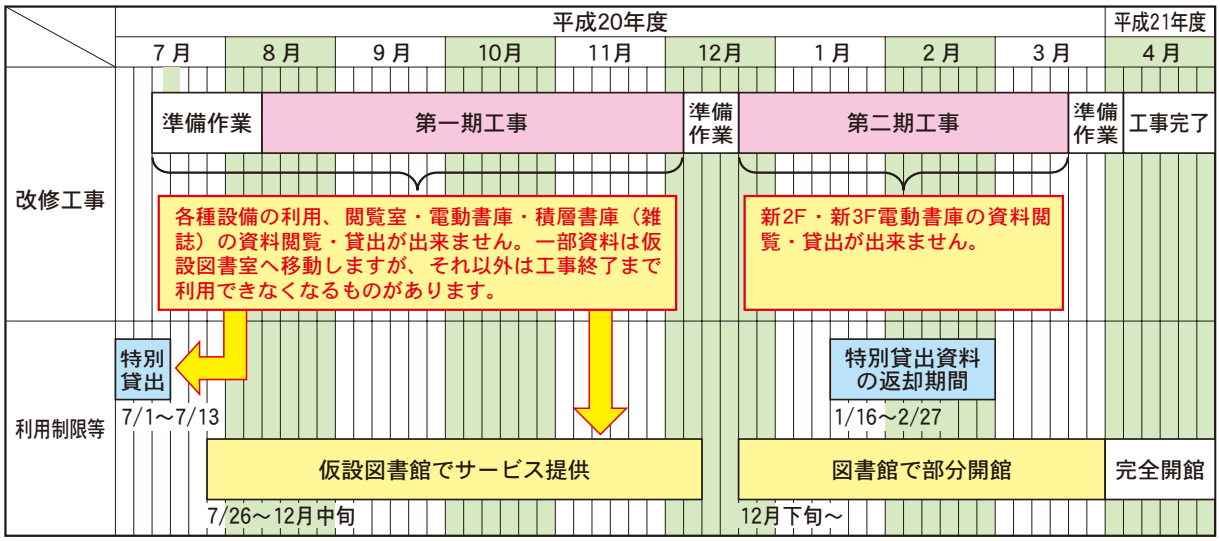
利用できるサービス：仮設図書室にある資料の閲覧・コピー・貸出・返却、文献複写・現物貸借の申込、パソコン（蔵書検索・インターネット検索等）の利用

※新２Ｆ電動書庫・新３Ｆ電動書庫の資料は12月中旬まで利用できますが、貸出手続きは図書館事務室で行います。仮設図書室設置期間中に利用できるのは、仮設図書室・新２Ｆ電動書庫・新３Ｆ電動書庫の資料のみになりますのでご注意下さい。

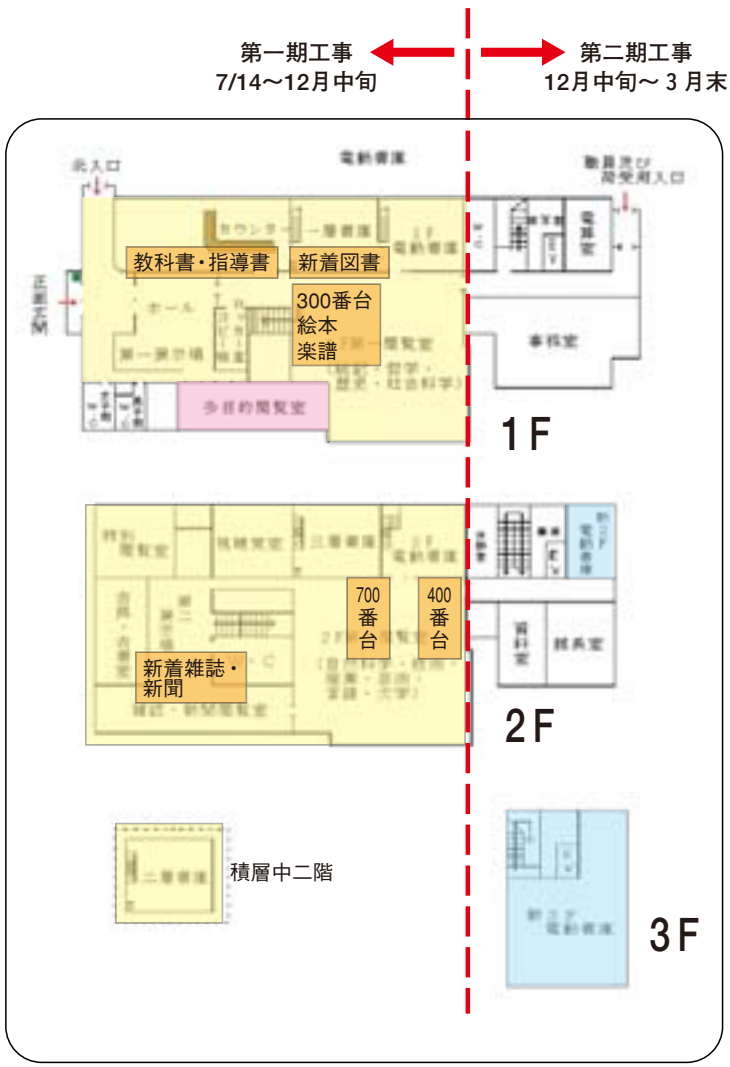
※今後の利用についての情報は、随時ホームページや掲示でお知らせ致します。

図書館からのインフォメーション

＜開館・利用スケジュール＞



＜7月から図書館の利用が制限されます＞



利用・貸出は7/13(日)まで
↓
7/14～12月中旬まで利用・貸出不可
↓
7/1(火)～13(土)に特別貸出を実施
(但し雑誌は7/7(月)～)

図書館での利用・貸出は7/13(日)まで
↓
仮設図書室で7/26(土)～12月中旬まで貸出可能

※300番台：政治、経済、教育等の社会科学分野
※400番台：数学、化学、医学等の自然科学分野
※700番台：絵画、音楽、体育等の芸術分野

利用は7/26・27を除く8/1(金)まで
(但し7/28～8/1は17時まで)
↓
8/2～12月中旬まで利用不可

12月中旬(第一期工事終了)まで利用可能
↓
12月中旬～3月末まで利用不可
↓
特別貸出実施する可能性あり

※新2F電動書庫：大型コレクション、個人文庫
※新3F電動書庫：過去分の教科書・指導書

特集記事：私は図書館をこう活用した ～大学での“勉強法”～ Part.2

『無駄？』な時間をすごしませんか

伊　藤　順　子

私は、一度学部を卒業し社会へ出た後、再度大学院に戻って「心理学」の勉強をしました。今から考えると若気の至りというか、無鉄砲というか「どうせ心理学を学ぶならば、心理学が進んでいるアメリカで」と考え、田舎の教育大学で講義を受けました。大学院で心理学の講義を取る傍らで、英語力をなんとかしようと学部生必修の「コンポジション」という講義を、10代の若い学生たちにまじって受けたのですが、恥ずかしながらその時初めて図書館の利用方法を本格的に学んだのです。

シラバスに講義２回目は図書館集合とあり、「論文の書き方を習いたいのになぜ図書館？」と無知な考えしか持たず、ふらふら図書館に出かけました。しかし、インストラクターの説明が始めると、そんな甘い思いはふっとんでしまいました。専門書・論文の検索の仕方の説明を一通り受け、広い図書館の案内が終わり、文献収集と作文の課題が出た時には、全くの放心状態でした。次の日から図書館通いが始まったのですが、第１の難関は、コンピュータでの文献検索でした。当時の私に似た学生さんから、「『遊び』についての論文を探しているのですが、欲しい内容の論文がなくて困っています」等の苦情を聞くのですが、それは「ない」のではなく、「さがせない」のです。どのような検索語を入力するか、語の間にスペースやハイフンを入れるか否かで、本や論文の質やヒット数が格段違ってきます。また、絞り込みに失敗してしまうと、畑違いの文献が残り「欲しい内容の論文がない」という状態に陥ってしまいます。それでも、ようやくこれかなと思う論文を探し当て、地下のマイクロフィルム保管庫にたどり着いてみると、年代が古く「古典」呼ばれるような内容で課題にそぐわなかったり、学会の大会論文集用の原稿で数行しか内容がなかったり。辞書を片手に読み始めたらもう手に入れていた論文だったり、引用文献にあがっている論文の方が必要なことがわかったり。次々に難関が待ち受けていて、本当に図書館では『無駄？』な時間を過ごしました。でも、この片手間で受けた講義の『無駄？』な時間のおかげで、本筋の「心理学」でも少しずつ自分の扱いたい分野や内容が見えてきました。そこで、とことん『無駄』な時間を過ごしてやろうと、閉館（なんと夜中の12時まで開館していたのです）までは、図書館を書斎兼勉強部屋にすることにしました。そうすると、顔見知りが増えて声をかけてもらえるようになりました。そして、英語の文法や表現に自信がない時は、顔見知りの学生さんにチェックをしてもらえるというメリットができました。また、図書館には、常に情報を専門にしているアルバイト生がいるので、原稿作成時の高度なコンピュータソフトの扱い方も教えてもらえました。その当時の私にとっては、図書館は、情報の宝庫であり、社会との接点の場でもあったと思います。「心理学」の講義よりも、この学部生用の「コンポジション」という講義が一番印象に残っているのは、この『無駄？』な時間のおかげかもしれません（課題作文は内容が専門すぎて、担当の先生から「もっと一般的なことを書いていいのですよ」と忠告を受けましたが）。

最近、ゼミの学生さんに「これを読んでみてごらん」と研究室にある論文を渡したことを思い出しました。実は、こうした私のありがた迷惑の行為が、学生さんの『無駄？』な時間を奪って「研究を面白くなくしているのかも・・・」と、この原稿を書きながら反省しています。

（幼児教育講座）

特集記事：私は図書館をこう活用した ～大学での“勉強法”～ Part.2

「図書館＝本」とは限らない

佐々木　ゆ　り

大学時代の私は、図書館で本を読むよりも、図書館に併設されているオーディオ/ビデオ（AV）ライブラリーセンターをよく利用しました。この施設は語学学習用の視聴覚教材だけではなく、映画（当時はビデオ）や音楽CDが豊富に取り揃えられており、学生はそれぞれ自分の空き時間を利用して、センター内で好きなビデオやCDを楽しむことができたのです。所蔵されていないタイトルも、随時利用者が購入希望を出すことができました。全ての希望が通るわけではありませんでしたが、希望が多いものはわりとすぐに購入されていたように記憶します。当時はテレビでの音声多重放送（二言語放送）も普及していませんでしたし、インターネットやケーブルテレビもない時代でしたので、外国語の音声を生（なま）で聞く機会は今よりもずっと限られていたのです。そんな中で、無料で（図書館利用証の提示のみ）外国の映画や音楽に自由にアクセスすることができるセンターは、大変ありがたい存在でした。和訳されている字幕や歌詞カードを原語での表現と比べるうちに、双方の言語構造の違いや、背景にある文化の違い、直訳では伝わりきらない表現などに気づき、興味がわいてきたものです。学生時代に通訳に興味を持ち、通訳の講義を受講したり通訳のアルバイトをしたのにも、このようなことが関係していたと思います。

私は現在リスニングを中心とした授業を多く実施しているのですが、このような施設があったら、例えば授業で使用しているCDをライブラリーに置くことにより、希望する学生は授業後にも繰り返し聞くことができるでしょうし、欠席した場合の補習として利用することも可能となると思います。各自がちょっとした空き時間を利用してAVライブラリーを利用することができれば、英語との接触を確実に増やすことができると思います。

英語という言語が多くの話者によって実際に使われている「生きた言語」である限り、生の音声を聞くことはとても重要です。幸い、英語は外国語の中では学習者にとってアクセスがしやすい言語だと思いますので、映画（現在はDVDで自由に音声や字幕の言語選択ができます）、音楽、ニュースやスポーツ番組など、自分の興味のあるものを選び、短い時間でも英語と接触する頻度を上げることができるでしょう。最近私が気に入っているのはオーディオ・ブックです。日本ではまだそれほどメジャーではないのですが、欧米では多くの書籍をテープやCDで楽しむことができます。私は大好きな「ハリー・ポッター」シリーズを原語で読んだ後、日本語版でも読み、そしてオーディオ・ブックでも聴きました。オーディオ・ブックは著名な俳優が読み手となっていることが多く、その表現力には驚かされます。各登場人物の話し方や独特のアクセント、緊迫した場面や楽しげな様子など、活字で読んでいたときよりもストーリーがずっと立体的に迫ってきます。一度に全部聴こうとせず、例えば１章ずつなどと区切って聴いていくと、まるで連続ドラマを見ているような感覚で楽しく続けられます。このようなオーディオ・ブックも輸入版となると大変高価なのですが、AVライブラリーで利用することができれば、英語の音声がもつ面白さに興味を抱く学生が少しでも増えるのではないか、と期待しています。

（英語教育講座／国際理解教育研究センター）

特集記事：私は図書館をこう活用した ～大学での“勉強法”～ Part.2

メタモルフォーゼのための読書

溝　田　浩　二

大学とは、自分から問題を発見する場所だ。高校まではただ与えられたものを理解すればよかったかもしれない。これに対し、大学は自由で、何でもできる。自分が興味を抱いたことをとことん追求できる。学生時代には、お金はあまりないかもしれないが、気力も体力も時間もたっぷりとある。

学生時代は、昆虫にたとえると「幼虫」の時代である。カブトムシを飼育した経験のある人は知っていると思うが、幼虫時代にどれだけ質の高いエサを、どれだけ多く摂取できたかによって、成虫になった時の体サイズが決まってくる。だから、立派な成虫になるためには、幼虫の時代にたっぷりとエサを食べ、体内に栄養を蓄積しなければならない。

また、学生時代は「サナギ」の時代でもある。幼虫時代に懸命に築きあげたものをいったんドロドロに溶かし、それらを再構成する時期だ。外からはあまり変化は見てとれないが、体の内部では劇的な変化が起こっている。自由に動くこともできず、外敵に対する抵抗の手段も持ち合わせていないこの時期は、やがて来たるべき羽化の日を夢見ながら、ひたすら我慢強く過ごさなければならない。

幼虫からサナギへ、そして、サナギから成虫へ。この変化を、昆虫学の世界では「メタモルフォーゼ」と呼ぶ。これは大きな変化であるから、「幼虫」または「サナギ」の時代を過ごす大学生がこの頃に不安を抱くのは当然だと思う。とくに、入学してから少したった５月、６月頃に、第１回目の不安を感じる人も多いのではないだろうか。かく言う私も、入学早々つまずいてしまったタイプの人間である。子どもの頃から野生動物が大好きで、獣医になりたいという希望を持って大学に入学したのだが、そこで挫折を味わい、鬱々とした日々を過ごした記憶が生々しく残っている。

そんな時に私を救ってくれたのが読書であった。皆さんも薄々感じていると思うが、授業で得た知識より、自分で本を読んで得た知識の方がはるかに大きい。人間は、元来、自分で学び取るようにできている。「学ぶことは楽しい！」とプログラムされているのである。大事なのは、プログラムがどうやって進んでいくか、ということだ。人間の大人になることは決まっている。でも、どんなことを学び、どんな努力をし、どんな大人になっていくか。それは人様々なのである。

カブトムシは卵からわずか１年で成虫になる。しかし、クワガタムシでは複数年かかるものが多い。クワガタムシの幼虫は、ある時期がくると（人生ならぬ）虫生を左右するような大きな選択を迫られる。“小さくてもいいから今すぐ成虫になるべきか”、あるいは、“もう１年を幼虫のまま過ごして大きな成虫になるべきか”という究極の選択である。

昆虫が生きている意味は、子孫を残すことにある。大きなクワガタムシの方が小さなクワガタムシよりも交尾を成功させる機会、子孫を残す機会は圧倒的に多い。そう考えると、後者を選択した方が賢明のように思える。しかし、小型の劣位なクワガタムシも少ない機会をスニーキング（こそ泥的な交尾）で必死に対抗する。これは、どちらがいいとか、悪いとかいった問題ではない。それぞれの生き方なのだ。

人生はたいてい曲がりくねっているものだ。その間にたくさんのことを学び、考え、試行錯誤を繰り返す。無駄な学びとか、無駄ではない学びというものはない。学生時代の不安や挫折は、大人になるために避けては通れない過程である。そこでどれだけ自分と真剣に向きあうことができたのか、どれだけ良質の本と出会い、自分を高めることができたのか、といったことが卒業後の人生を決めてしまう。不安や苦悩が大きければ大きいほど、それを克服したときに獲得する自信は大きい。

皆さんが充実した「メタモルフォーゼ」の日々をこの大学で過ごし、やがて、すばらしき羽化の日が訪れんことを祈って本稿の筆を置く。

（環境教育実践研究センター）

特集記事：私は図書館をこう活用した ～大学での“勉強法”～ Part.2

講義よりも図書館で ～大学で勉強するということ～

井 柳 美 紀

大学に入学して間もない頃、学者と見間違うばかりの博識の持ち主で、大学の教師と互角に議論のできた先輩が「講義にはあんまり出ないなあ、図書館で勉強しているから」と自慢げに語っていたのが、当時新入生だった私には実に格好良く映った。（ただし、のちに知ったことだが、彼は大学の授業にはかなり真面目に出席していた。）かくして学生時代、私が勝手に思い描く大学生らしい生活のために、（幾つかの興味ある授業と勉強会サークルに熱心に取り組んだことを除けば）授業よりはむしろ図書館が私の勉強場となった。

出席する講義数は多くなかったとはいえ、図書館での私の勉強は必ずしも講義を無視したものではなかった。「これは」と思った講義のためには、講義で紹介される参考文献や自分で探し出した関連資料を読んだりして、結構なエネルギーと時間を費やした。ただ、これらは予習や復習といった類のものであるより、理論武装をしては先生に質問に行って議論を楽しむためでもあった。当然ながら、授業を聴いているだけでは、その授業を疑ってかかる視点（逆に言えば、正しいと判断する視点）はなかなか持てない。授業を相対化してみる視点を図書館でみつけ、複数の立場を検討して自分の立場をつくる、そして先生と議論を交わすことでまた新たな視点が持てる。それには、それ相応の労力が必要である。当時、友人には「非効率な勉強だねえ」と笑われたが、そういう勉強が楽しかった。

ある著名な政治学者が、「自分は本を読むよりも、ただ考えているだけの時間の方がずっと長い」と述べていて、感心したことがある。たしかに学ぶには、本を読む、講義を聴く、という受動的な姿勢だけでは不十分で、（受容するにせよ批判するにせよ）それらをいかに自分のものとするかが問われるはずである。知識を仕入れるだけではなく、それについて自分なりに熟慮・思案する時間が何より大切だと思う。

自分の考えを整理・構築するという点では、図書館の多目的スペースも役立った。そこは普段は友人たちの溜まり場となり、テスト直前には「テスト勉強会」の会場になった。「テスト勉強会」とは、テスト直前の１～２週間前、常時２～10名位の友人たちが参加しての、文字通りのテスト対策会で、１年時に自然発生的に始まり卒業まで続いた。得意科目のある学生が講義を始め、次第に質疑応答、最後は「小選挙区制は…」「過失責任主義は…」などと白熱した議論を展開する。分からない問いがあれば、図書館の本棚に速攻向かい、専門書やら事典やらをひっくり返して解決する。この勉強会は、必要に迫られてのものだったが、驚くほどの盛り上がりをみせた。自分たちで講義し質問し合うことで知識を確かなものとし、さらにその知識を自由に使いこなすことで、自分で考えることの喜びをみな感じたのだと思う。

さて、図書館中心という私のかつての勉強法をいま振り返り、効率よく学べる講義をもう少し上手く活用した方がよかったのではないか、という後悔もある。とはいえ、いまだに大学入学当初の先輩の言葉は私の中では格好良い言葉として色褪せていない。この言葉を今、私が皆さんに言うとすれば、文字通りではなく一つの比喩として、やはり同じ言葉を投げかけたいと思う。なぜなら授業はあくまで何かを学ぶための素材を与えてくれる場であり、本来の勉強はそこから出発するものであるからだ。授業を絶対視せず、それを素材として活用し、自ら主体的に思考することへと繋げる、そのためにも自分だけの勉強時間を持つことが肝要だ。そういう意味では、講義よりも図書館で、は今でも正しい回答だと思う。

（社会科教育講座）

第9回 学生の読書室 ～私が選ぶこの一冊～

『としょかんライオン』

（ミシェル・ヌードセン作、ケビン・ホークス絵、福本友美子訳、岩崎書店、2007年）

学校教育専攻４年：加　藤　千　佳

図書館は静かに本を読むところです。みんながきまりを守って使う場所です。そんな図書館に突然ライオンが現れ、みんな大慌て！しかし図書館のきまりを守るお行儀のいいライオンは、すぐにみんなの人気者となり、毎日図書館にやってくるようになります。けれどもある日事故が起きて、ライオンは…。

このお話は図書館という場所での出会いや、心の交流の素晴らしさを味わうことができます。そして読み終えたとき、ホッとした温かい気持ちになります。図書館といえば、最近はレポートや卒論の資料を探すためだけにしか利用せず、図書館＝勉強というイメージができていました。しかしこのお話を読んで、こんな図書館あったらなあ…。と夢を描き、また本を楽しむという本来の図書館の意味を思い出しました。

大人でも十分に楽しめる絵本です。またやわらかいタッチで書かれた絵にも心が癒されます。ホッとした気持ちになりたい人は是非読んでみてください。

『星の王子さま』

（サン=テグジュペリ、河野万里子訳、新潮社）

社会科教育専攻３年：岡　崎　也　実

「星の王子さま」、読んだことはなくても、名前だけは知っている、という人が多いと思います。しかし、この本は読んでから価値がよくわかる本です。ひとつひとつの言葉が宝石のようにきらきら光っていて、文章は、心地よく、暖かい余韻を残します。

「僕」と王子さま、バラと王子さま、キツネと王子さま、それぞれの関係はみんなお互いに世界でひとりだけの存在。家族、恋人、友達との関係がどういうものなのかを教えてくれているように思います。

王子さまは、とても弱くて、今にも壊れてしまいそうなのに、誰よりも強くて優しい「想い」を持っています。それは、今の私たちに欠けているものなのかもしれません。だから、ひとつひとつの言葉が心に響いてくるのだと思います。

何度読んでも、何年経っても、色褪せることのない、宝物のような一冊です。

ここは学生の皆さんが最近読んだ本、印象が強かった本、お勧めの本などについて自由に選んでいただき紹介してもらうコーナーです。図書のみとし、雑誌は除外しています。

たくさんの原稿が集まりました。ありがとうございました。

いただいた原稿を編集委員会で選定し掲載させて頂きました。

今後もこの企画を継続していきますので、皆さんからの投稿をお待ちしています。

ここに紹介する本は図書館入り口の書架に「学生の読書室」として配架しています。

【原稿大募集】

次号発行は３月の予定です。

名前、所属、学年、連絡先と、紹介する本の書名、著者名、出版社を記入の上、400字以内で、図書館カウンターにフロッピーディスクで、または下記アドレスへお送り下さい。

尚、「こもれび」の記事は図書館のホームページでも公開されます。

tojokanri@staff.miyakyo-u.ac.jp

図書館に所蔵していない図書については、学生希望図書として図書館に購入希望を出していただくことも出来ます。

『時生（トキオ）』
（東野圭吾、講談社、2005年）

社会科教育専攻２年：藤　原　麻莉那

あなたは、「グレゴリウス症候群」という病名をご存じだろうか。
主人公である宮本拓実の息子、時生はその遺伝病のために意識を失い、もはや死を待つばかりの状態となっていた。
息子の最後を悟った拓実は、二十年以上思い出すことがなかった記憶を、ぽつぽつと妻に語り始める。
何をやっても長続きせず、すぐにキレてしまう二十三歳の自分と、“トキオ”と名乗る青年との、わずか二ヶ月の間に起こった大きな出来事を――。
だらしない若い頃の父親を必死に支えようとする“トキオ”の健気な姿、徐々にではあるがそれに影響を受けていく拓実。そして、父と子の時を超えた強い絆。
この物語には、たくさんの大きな感動が詰まっています。
何故、二人は二十年以上前に花やしきという場所で出会ったのか。最後の一文でそれが明らかになった時の切なさと感動を、私は決して忘れません。是非、少しでも多くの人にこの気持ちを味わってほしいと思います。

『子どもたちの８月15日』
（岩波新書、2005年）

学校教育専攻４年：保　坂　あやこ

この本は1945年８月15日に子どもだった方々の回想が収録されています。当時子どもだった筑紫哲也、扇千景、皇后　美智子、永六輔、柳田邦夫ら33名に、終戦はどのように映り、どのような生活を送っていたのかを読みとることができます。『腹を極限まで減らした八歳の子は「天皇さまより梅干」だった。』『先生が教壇で切腹するなら掃除当番を増やさなきゃ。そういう冷静さが、かえって子どものほうにはある。』『川に泳ぎに行くと空襲警報のサイレンで家に帰らなければいけない、そういうのがなくなったのがうんと嬉しかった。』
私たちは、自分自身が戦争について理解を深めていくと同時に、次の世代へと戦争の悲惨さを伝えていかなければならないのだと思う。戦争体験者から話を聞くことができる機会がどんどん減っていくなか、このような本はとても貴重なものだと思う。

『プリンシプルのない日本』
（白洲次郎、新潮文庫、2006年）

生涯教育政策専攻３年：高　橋　由　衣

白洲次郎は裕福な家庭に生まれ育ち、留学先のイギリスで青春時代を過ごした。その後は、欧米と日本の橋渡しとなる仕事をし、吉田茂と知り合い彼の補佐役となる。戦中は農業に従業し、戦後は終戦連絡中央事務局次長に就任し、日本国憲法の制定に立会い、日本の経済の建て直しに奔走する。
この書は、そんな白洲の唯一の直言集である。彼は、この書の中で「事なかれ主義の官僚」や「政局にばかり現を抜かす政治家」や「真実を報道しないマスコミ」を批判している。また、憲法については「アメリカに押し付けられた」と評する一方で「筋が通っている」とも評している。
白洲氏の批判は現代の日本の問題点にも当てはまる点で見逃せない。いや、日本は60年以上も前から成長していないと言っても過言ではない。
我々が「プリンシプルのない日本人」のままで生きてゆくには厳しい世界情勢となっている今、この書を読んで政治に対する意識を変えていくべきではないだろうか。

『私と図書館』

図書館の思い出

黒　川　哲　也

生来騒々しい私は、「静粛」にしなければいけない場所が苦手だ。多くの人が同じ場所にいながら自分の世界に没入するような場所――図書館はその代表――は、特に苦手だ。そんな私が図書館（とその周辺）に足繁く通ったことがこれまで３度ある。

私が通った小学校の図書館は、木造一階建てのかなり古い建物で、校庭の片隅にこぢんまりと佇んでおり、校舎とは渡り廊下で行き来できるようになっていた。その図書館の横には大型遊具が設置されており、主に低学年の児童の遊び場になっていた。５年生の頃、スポーツ少年団に所属している者を中心に、クラスの男子の中でサッカーがブームとなった。サッカーゴールが設置された校庭の中央は６年生に占領され、私たちはブツブツ文句を言いながら、図書館横のバスケットコートで（低学年の子どもたちを蹴散らしながら）サッカーに興じていた。建物の近くでたいして上手くもない「ちばけた（山口弁で「調子に乗った」の意）ぼうずら」がボールゲームをやれば当然（サザエさんのカツオ君のごとく）事件は起こる。私たちは何度も窓ガラスを割り、何度もこっぴどく叱られた。小学校時代の図書館にまつわる思い出は、それくらいしかない。実際、同じ頃、女子の間で「アガサ・クリスティーブーム」が巻き起こり、彼女たちは競い合うように図書館で「そして誰もいなくなった」とか「Ｙの悲劇」とかを借りて読んでいたが、私がそれらを読んだのは大学に入学してからだった。

そんな私が図書館の「中」に足繁く通ったのは、高校３年生の頃だった。中学時代は「はだしのゲン」を読破するためだけに図書室へ何日間か通った程度だったが、インターハイの予選で見事敗退し、「受験生」となった私は、授業が終わると友人と誘い合って近所の県立図書館へダッシュするようになった。休日は朝9：30の開館に間に合うように待ち合わせをして、席を確保するほどの熱の入れようだった。しかし、だからといって必死に勉強したわけではない。日曜日、朝から夕方まで図書館にいても、確保した席にはほとんど座らず、リスニングルームでFMラジオを聴いていたり、近隣の女子校の生徒と仲良くなって一緒に昼食を食べにいったりして時間を潰していた。図書館は田舎の貧乏高校生にとって格好の「社交場」だったのである。だから受験が差し迫ってくると図書館通いはしなくなり、自宅に籠もって勉強するようになった。昨年の夏、盆休みで帰省した際に久しぶりに県立図書館に行ってみた。私たちの頃と同じように、高校生たちが席を占領し、庭の木陰で語らっていた。懐かしく、少し嬉しかった。

大学に入っても、図書館とのつきあい方は大して変わらなかったが、唯一好きになったのは「書庫」と呼ばれるスペースだった。明るく多くの学生や教員が行き来する閲覧スペースから暗くひんやりとした書庫へ入ると、古い紙の酸っぱい臭いが鼻をつく。この臭いがキライではない。お目当ての論文が掲載されている雑誌を探し出し、該当ページに栞を入れて積み上げていく。とりあえず持てるだけの雑誌を抱えてコピー機まで運び、コピーし終えたら元へ戻す。本学のように電動式の書架などという文明の利器はあるはずもなく、３つくらいのフロアを上がったり降りたりしながら文献を探す作業は骨が折れたが、予期せぬ掘り出し物の論文に出会うことも多々あり、楽しくもあった。何より蔵書の豊富さはかけがえのないものだった（小さな私立短大に赴任して、教育・研究の両面で痛感させられた）。

結局、図書館の「中」でゆっくり時間を過ごすことのない学生時代だったが、これからも図書館に対する「苦手」という意識と「かけがいがない」という思いは変わらないだろう。

（保健体育講座）

『私と図書館』

学校図書館

片　山　栄　次

４月より縁あって実務家教員として宮城教育大学教職大学院にお世話になることになりました。それ以前の大部分の期間を小学校教員として過ごしてきた私にとって図書館と言えば、「学校図書館」（通常、学校では「図書室」と呼ばれている部屋）が思い浮かびます。学校図書館は、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けらる設備」（学校図書館法第２条）です。学校図書館は、通常、図書と閲覧用のスペースで構成されていますが、情報教育の進展とともにコンピュータ等が置かれていることも多くなってきました。この学校図書館で子どもたちは、日々本を読んだり調べ学習をしたりしていることから、その整備・充実が学校の重要課題となっているわけですが、以下のような問題もあり対応に苦慮している面もあります。

問題の１点目は、読書離れ、活字離れです。この問題は随分前から指摘されているところですが、文部科学省による全国調査（親と子の読書活動等に関する調査　平成17年３月実施）により改めてその深刻さが浮き彫りになりました。１つだけ挙げてみますと「一ヶ月に読んだ本の冊数が０冊の割合として、小学２年生2%、小学５年生6.9%、中学２年生14.8%、高校２年生26.2%、保護者27.4%」というデータがあります。理由としては、「本を読む時間がない」という理由が約５割を占め最も多いのですが、やはり、読書離れの深刻さを裏付けるデータと言えるのではないでしょうか。

問題の２点目は、図書費の減額です。学校図書館を充実させるために、2007年度に国が全国の市町村などに交付税として財政措置した図書購入費200億円のうち、実際に自治体が本の購入に予算化したのは78%にとどまり、20%超に当たる約44億円が他の目的に使われていたそうです。一部の報道では、財政難のあおりを受けて図書購入費が“流用”されたという表現もありました。ちなみに、宮城県の予算措置率は53.6%です。数値を単純に図書の充実と結びつけるのは早計ですが、やはり寂しさを感じるところではあります。実際、図書室に入ってみると新刊が並んでいる一方で、古く傷んだ本がテープなどで補修されて並んでいるといった状況を見かけます。また、多様化する調べ学習に参考図書の補充が間に合わないといった傾向なども見られるところです。

以上、２点について学校図書館を取り巻く問題を述べてみましたが、学校ではこうした問題にめげず、読書活動推進のために様々な工夫を凝らしています。朝の読書タイム、移動図書館との連携、読み聞かせボランティアの活用、読書に関わるイベントの開催、図書とインターネットの併用等々、挙げていけばどんどん出てきます。家庭や地域に呼びかけて図書を増やしている取組もあります。これらの取組により学校図書館の利用や読書に対する関心・意欲等は確実に向上していますが、逆にいうと、それ程の工夫や具体的な取組が必要な状況になっているとも言えます。学校図書館の充実は、子どもたちの学びの充実につながることを思うと、今後もさらなる工夫改善が求められるところです。

ところで、前述の文部科学省の調査では高校生までが対象でしたが、大学生はどのような状況なのでしょうか。また、本学附属図書館の状況はどのようになっているのでしょうか。着任して日も浅く、分からないことの多い中、興味の対象の一つとして見ていきたいと考えているところです。

（専門職学位課程（教職大学院））

『私と図書館』

附属図書館と私

齋　藤　嘉　則

私は今回で３回、宮城教育大学にお世話になることになります。１回目は、学部学生の４年間、２回目は、教員になって８年目のことでした。宮城県教育委員会の派遣で大学院の院生として２年間、そして今回、教職大学院の実務家教員としてお世話になることになりました。そのたびごとに私には、附属図書館で過ごした思い出があります。

私が学部学生の時には、図書館の多目的閲覧室がLL教室として使用されていました。私の入学と同時に、LL教室の機材が最新式の機材に更新され、そこで、昼休みの15分間、NHKラジオ語学講座「英語会話」を録音で聴くことができたのです。講師は東後勝明さんで、当時150円のテキストを生協で買って、時々、その番組を聴きました。大学を卒業して、勤めた初任地が離れ島でしたので、漁船の無線の関係でしょうか、ラジオの電波の状態があまりよくありません。ガーガーピーピーという雑音のため番組が聴きづらく、わざわざＬＬ教室の事務の係の方にお願いして、「英語会話」の放送の録音テープを郵送していただいたことがありました。

なぜ、そんなことまでして「英語会話」を聴いていたのかと申しますと、教壇に立って生徒に英語を教える、という段になって、はじめて、はたと困り果てたのです。学生時代の不勉強を悔やんだものでした。生徒に申し訳ないと思い、それで毎日少しでも英語の勉強もしようと考えて、下宿のラジオで「英語会話」を聴いていました。

そして、教員になって７年が過ぎ仙台市内の中学校に勤務しておりましたが、現職のまま大学院進学の話がありました。幸運にも２年間、宮教大のキャンパスで過ごすことができたのです。指導教官からは研究論文を読みなさいとの指示があって、研究雑誌に掲載された論文を中心に読んでいましたが、読みたいと思う論文の中には、本学の図書館にない研究雑誌に掲載されている論文もありました。そこで、他大学の図書館にお願いしてその論文のコピーを図書館経由で手に入れるという方法をとりました。その際、随分、図書館の担当の方にお世話になりました。

また、許可を得て書庫の中をよくのぞいて、英語教育関係ばかりではなくいろいろなジャンルの雑誌のバックナンバーをぱらぱらと眺めていました。英語教育関係では、大修館の「英語教育」や今は休刊になっている研究社の「現代英語教育」のバックナンバー、さらに、他大学の研究紀要からも興味のあるものや修士論文をまとめるのに役立つであろうと思われるものをコピーしました。当時は、学生用のコピー機は萩朋会館にありましたので、雑誌や紀要をそこまで持ち出して、片っ端からコピーしていました。しかし、そのコピーをすべて読んだのか、といいいますと、私の場合は、コピーすることだけで満足してしまい、まるで、その論文を読んだ気になってしまっていたような気がします。

最後に、この４月、また、縁あって教職大学院に赴任して参りました。早々、図書館内を散策していましたら、古い本ですが研究社の「英語教授法」という本が目にとまりました。その中にある、山家保さんという方が書いた「フリーズを中心とする英語教授法」を今読んでいるところです。今回は、小学校から高等学校までを見通した英語教育の教授法について少し勉強しようと考えています。その点について、山家保さんが戦後日本に紹介したフリーズを中心とした英語教授法はとても示唆的で大変参考になります。調べてみると、フリーズ自身の著作もちゃんと図書館に蔵書されていて、これからそれらをじっくり読んでみたいと思っています。

以上が、宮教大附属図書館と私のかかわりです。私の思い出に残ったことです。今は館内もとても整備されきれいになっています。これからもいろいろとお世話になることと思いますので、よろしくお願いします。

（専門職学位課程（教職大学院））

『私と図書館』

私にとっての図書館

松　尾　隆　治

「本との出会い」というテーマなら少しは話題があるかもしれないが、「私と図書館」となると特段何も思い浮かべるものはない。私は未だに図書館とは出会っていないのかもしれない。

小学校の図書室は場所すら思い出せない。児童数２千人を超える学校にあって、利用すらしていないのかもしれない。あのころ確かに１週間のTV番組欄を暗記していたから間違いなくテレビっ子であった。電気屋の父を尊敬する素直な息子だったと思う。

中学校の図書室は覚えている。コンクリートの校舎に囲まれた中庭に一部残された古い木造校舎を利用して図書室となっていた。時代を感じさせる黒光りする板張りの床は歩くとギシギシと音が鳴り、木枠の窓ガラスも地震のようにガタガタ鳴った。北側の資料室ときたら昼なお暗く、そこから授業の掛け地図など持ってこいと先生に命令された日には、突然腹痛になってみせる演技力が必要だった。ところが、そんな図書室に大学ノートと筆入れを持ちこみ、人体科学か何かの本を書棚から取り出して、タンパク質とかアミノ酸の構造とかを書き写し始めたことがある。もちろん受験や授業とは関係ない。「俺は医者になりたい、だから、今からそういう勉強をするんだ」と考えたのだ。おそらく、医者が活躍するテレビドラマでも観たのであろう。道徳の話に感動したのかもしれない。図書委員会の女の子が気になっていたせいではないと思う。確かに２ページ目までは私にしては珍しく色鉛筆や定規まで使って丁寧に書き写してあった。２日くらいは続いたのだと思う。３日は続かなかった。飽きたのだ。

中３になると、受験生は県立や市立の図書館に通うものだ、そういう受験生は大人たちが大層褒めるものだという噂が田舎の港町の中学生に聞こえてきた。常によい中学生になることを心がけていた我々は電車に乗り、はるばる都会（と信じていた）の図書館までやってきた。さすがに都会の図書館は天井いっぱいに蛍光灯が並び、夜でも昼の明るさを保っていた。カバンをロッカーに預けるのもカッコよかった。そして何より１階には食堂があった。持参した問題集をぺらぺらとめくりながら、今日は何時に天ぷらそばを食べようかな、ということばかり考え、しばしば休憩してはその相談ばかりしていた。食券を買い、セルフで受け取り、食器を片付けることが大人っぽさや都会を感じさせた。本の借り方は把握しなかったが食堂のセルフサービスについては完全に理解した。高校入試も経験せずに気分だけは高校生になっていた。

大学の図書館はさすがに本を探し、参考文献の在処を同じゼミの学生に尋ね、全十数巻のOEDなども引いてみた。17世紀英国形而上詩など誰が読むんだと思いきや、意外に多くの文献が出ていて驚いた。図書館では授業のノートをコピーさせてくれる優しい女子学生や教採の勉強をしている真面目な学生も探すことができたが、どうも自分には似合わない場所のように感じられて遠慮することが多かった。食堂や喫茶店から見えない力によって引き寄せられるのだ。本が嫌いなわけではない、静かに人が勉強している広い空間に迷い込むと思わず「ワッ」と言って驚かせたくなるのだ。

中学校の教師をしてきた。図書室で子供たちが物語や小説に熱中している姿を見ると無性にうれしくなる。暖かい木洩れ日が窓から差し込み、遠くに野球部のかけ声やボールを打つ音などが響くとさらに趣があって心地よい。

（専門職学位課程（教職大学院））

『私と図書館』

未来を育てる図書館

渡　邊　忠　彦

私の小学生時代、大した娯楽もなく貧しかった昭和30年代は、本を読むことは本当に楽しみの一つだった。本を手にするたびに日常から離れ、未知の世界に踏み込むワクワク感がたまらず、学校の図書室から本を借りてきては読みふけり宿題を忘れてしまうこともしばしばだったのを思い出す。

当時、歴史に凝っていた私は、図書室の本に飽き足らず、県立図書館があるのを聞いて恐る恐る訪ねたことがあったが、当時の公立図書館は本当に貧弱なもので、期待するような本も無くがっかりして帰ってきたのを覚えている。それからは、小遣いを貯めて本を買うか、学校の図書室で満足するしかなかった。教員になってからは、読みたい本は自分で買うという生活がしばらく続き、小遣いは本代に消えた。

平成に入り、そんな私に、県立図書館奉仕課視聴覚資料係長への異動が命ぜられた。そして、現在の宮城県立図書館の新館建設の準備に携わることになったのである。正直言って大変だった。図書館の利用者ではあったが、図書館の果たす役割を正面から考えてきたこともなく、司書の資格もない私が、しかも新館サービスのメディア資料等の責任者でシステム一般を新たに担当することになったからである。そのうえ、図書館職員全体も書籍中心の思考から抜け出でないためメディア資料等への理解もなく、支援スタッフもつかなかった。

ともかく、私は初めて、書庫に眠る動画フィルム・ビデオ、静止画の資料、音声、廃盤になったレコードの山、楽譜資料等に、また1200枚を超す古地図や、藩政時代の絵巻物に触れることができた。そして、従来の文献だけの新館図書館にしてしまったら後世に申し訳ない、なんとかデジタル資料としてよみがえらせ、財産として活用しできないだろうか、という思いに駆られるようになった。

そこで、今思うと滑稽でもあるが、当時はインターネットも、ほとんどの人が知らない時代だったが、マルチメディア時代にふさわしい図書館にしようと、来るべきネット情報時代へ対応した視聴覚ブースコーナーの拡大とアナログ資料のデジタル化。そして目玉に音楽図書館化構想、眠っている貴重な絵図等の郷土資料をデジタル処理して取り込み超高精細画像でサービスする構想、また古地図を基にCGを使って旧仙台城下を復元する構想等々を民間の力を借りて練り上げ、本庁にも出かけて説得して回ったものだった。

２年で県立図書館の仕事は終わったが、私にとって貴重な体験だった。それは、図書館とは古びた本が並び所蔵されている、薄暗い完結した施設との先入観が吹き飛んだことである。

やがて、生涯学習の時代が本格化すればするほど、市民が学び続ける拠点は図書館以外にないにちがいない。しかも時代の変化や市民の成長度に合わせて、図書館には高度な内容が要求され、新たな産業や文化を生み出す原資となる情報が集積していく場所として活用されるだろう。文献だけでなく各種のメディア資料も区別なく利用され、世界中の情報端末にアクセスできる空間になるのだろうと思えるようになったことである。

近年、学校図書館も読書の場所だけでなく、情報センターとしての機能が求められるようになってきた。また、大学だけでなく自治体も整備された図書館を持つことは、都市機能の高さを表す指標とされる時代になってきた。そして今の私は、図書館への投資は、間違いなく未来への投資である時代が見えてきたように思っているところである。

（専門職学位課程（教職大学院））

常設展示の報告

常設展「中学校英語教科書　戦後の歩み」

藤　田　　博

「中学校英語教科書戦後の歩み」と題する常設展を企画、開催しました。中学校英語教科書と言えば*Jack and Betty*、終戦を起点にたどるとすればなおのことそう言えます。その意味で、*Jack and Betty*の登場を中心とした第１期「*Jack and Betty*に始まる」と、*Jack and Betty*以降の第２期「*Jack and Betty*の終わり」とに分けた展示をしました。第１期は３月から４月、第２期は５月から６月までのそれぞれ２か月です。

*Jack and Betty*の誕生は昭和23年でした。22年に発足した新制中学校の英語教科書として、学習指導要領（試案）英語編で示された英語教育の目標に応えてつくられたものです。編著者、萩原恭平、稲村松雄、竹沢啓一郎の三人が立てた基本構想は、１）アメリカ英語、特に中西部の英語を採用する、２）社会科教育の一環として、アメリカ社会における同年配の少年少女の暮らしを紹介するなどでした。23年の教科書展示会において、全国の８割を超える中学校で採択という圧倒的支持を得た*Jack and Betty*は、24年から使用が開始されます。「*Jack and Betty*時代」の幕開きです。以来、*Jack and Betty*を冠した教科書は、*Standard Jack and Betty 3rd Ed.*が終わる46年までつづきます。

22年にわたって全10種類が発行されつづけた*Jack and Betty*は、37年、*New Prince Readers*（47年からは*New Prince English Course*に名称が変更。61年まで５度、版を改めて発行）に交代、その役目を終えることになります。*Jack and Betty*が隆盛であったのは、34年から36年の*New Edition Jack and Betty*あたりまで、それ以降は採択数が減っていきました。それでも*New Prince Readers*の誕生に到るまで、採択率が５割を切ることはなかったのです。

教科書が時代を映すものなのは言うまでもありません。その教科書が学習指導要領の影響下に置かれるのも言うまでもないことです。44年告示（47年実施）の学習指導要領では、中学校英語について週３時間、年間105時間の完全実施が掲げられます。*Jack and Betty*が*New Prince English Course*に変わったのは、法的拘束力を持ったその学習指導要領に対応したものをつくらざるを得なかったということ。22年の学習指導要領では、１週の授業時数が４時間以下では効果が薄いことが明示されていました。それと比較すると違いは明らかです。44年学習指導要領には、“but”は中学第二学年の指導事項とする、従って一学年にあっては使用してはならない、三学年すべてに「否定の疑問文、命令文」を入れてはならないといった「不合理」なことも盛り込まれています。理想主義時代の*Jack and Betty*と、現実主義時代の*New Prince English Course*の違いと言えるかもしれません。

47年に*New Prince English Course*など５冊、48年に４冊、50年に５冊が出されます。37年の*New Prince Readers*と47年の*New Prince English Course*の間、41年に登場した*New Horizon English Course*が、その後10年で中学英語教科書界の主役となっていきます。50年出版の５冊は61年まで12年つづきます。停滞ぎみとも思われるこの12年を経て、平成の時代へと入っていく、それによっていま現在使われているものが見えてくるのです。

（英語教育講座）

* Jack and Betty: English Step by Step 1st Step
開隆堂出版　昭和23年検定済、昭和25年検定済

展示風景

平成20年度７月～12月　開館カレンダー

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

12月

仮設図書室は12月初旬または中旬までの利用となります。
それ以降は、附属図書館で開館します。
詳細が決まりましたら、ホームページなどでご案内します。

通常開館	月曜日～金曜日　9:00～21:30
土・日開館	土曜日・日曜日　10:00～17:00
休業期間中	月曜日～金曜日　9:00～17:00
休　館　日	国民の祝日・本学創立記念日・夏季一斉休業・年末年始・本学学位記授与式当日
	仮設図書室オープン期間

注１）：８月23・24・30・31日、９月６・７・13・14日の各土日は、教育実習期間の特別開館をします。
注２）：改修工事等に伴い、臨時休館または開館時間を変更する場合は、その都度掲示・図書館ホームページによりお知らせします。

表紙の解説

蓼（たで）食う可憐な蝶 ―ベニシジミ―

環境教育実践研究センター　溝　田　浩　二

キャンパスを歩いていて、「赤い小さな蝶がいるな」と思ったら、そっと近寄って目を凝らして欲しい。鮮やかなオレンジ色を身にまとい、後翅にはサファイア・ブルーの紋がちりばめられた、その上品な美しさに感嘆の声を上げるに違いない。レンズ越しに見つめると、さらにドキッとするほど美しい。ベニシジミは、出会うたびに“美の再発見”をさせてくれる蝶である。

ベニシジミは北半球の冷温帯地域に広く分布し、ヒマラヤの高地や北極圏にまで生息している。日本では、住宅地周辺の道端から野原や山道にいたるまでどこでも見られ、春先から秋にかけていつでも出会うことができる、いわゆる“普通種”の蝶だ。『蓼（たで）食う虫も好き好き』という諺があるが、この幼虫は路傍に生えるスイバ（スカンポ）、ギシギシといったタデ科植物の葉だけを食べて育つ。ほかの昆虫たちが見向きもしないタデの仲間に目をつけ、食糧を独占することで、ベニシジミは繁栄を遂げてきたのだろう。

可憐さと強かさ―このギャップもまた、ベニシジミという蝶の魅力である。

編集委員　附属図書館運営委員会委員　笠間　賢二（学校教育講座）　井柳　美紀（社会科教育講座）

編集後記

これから年度末にかけて、耐震補強のための図書館の全面改修工事が実施されます。ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願い致します。狭い仮設図書室で、いかにサービスを継続して利用者の皆さまのニーズに答えるのか、最大限努力しています。　（Y. S.）

編集・発行：宮城教育大学附属図書館　〒980-0845　仙台市青葉区荒巻字青葉149　平成20年７月10日発行
附属図書館オフィシャルサイトURL　http://www.lib.miyakyo-u.ac.jp/